



Title	遠隔教育における器楽指導の実践と課題について・その2
Author(s)	加納, 暁子
Citation	教育実践総合センター紀要, 8, pp.221-227; 2009
Issue Date	2009-03-20
URL	http://hdl.handle.net/10069/25927
Right	

This document is downloaded at: 2019-09-18T18:18:48Z

遠隔教育における器楽指導の実践と課題について・その2

加納 暁子（芸術表現講座）

I はじめに

長崎県内では、長崎市、佐世保市、大村市に人数は少ないものの、弦楽器の指導者が集中している。一方、離島地域では、せっかく弦楽器に興味を持って習いたいと思っても、指導できる人がいないため、諦めてしまうケースが多い。そこで、このような問題を解決するために、遠隔教育システムを用いた器楽指導の可能性に関する研究を前年度より取り組み始めた。まずは、大学構内の2か所を学内 LAN で結び、大学生を被験者として実践を行った。その結果、比較的短時間で指導目標が達成でき、映像を正面から見て見えにくい手の裏側の指などをアップにして映し出すことの必要性の他、手や腕の力加減が分かりづらいという課題を得ることができた。そこで、今年度は、実際遠隔地において、子どもを対象として実践を行った。本論では、その成果と課題について述べていく。

II 研究の方法

実践は、2008年8月15日（金）、及び8月20日（水）9時～12時、長崎大学教育学部音楽棟3階の筆者の研究室と、沖縄県南城市知念の一般家庭を結んで行われた。長崎側は学内 LAN、沖縄側は ADSL の回線を用い、テレビ会議システムは Skype を使用した。被験者は A さん（中1女子、ピアノ学習歴有り）、B さん（小1女子、音楽学習歴無し）。A さんと B さんは姉妹で、A さんと B さんの間にもう一人、チェロを習っている女の姉妹がいる。父親もチェロを弾かれるので、常に家庭の中には音楽が流れている環境である。前回と同様、実践内容はヴァイオリンの初歩的な指導になるが、回線状態が異なることと、被験者の年齢が下がることによって、どのような変化が見られるのかが、焦点となってくる。

III 実践内容

以下、中1の場合と小1の場合に分けて、指導の経過を、時間、指導内容、気付いた点に分類し表にまとめながら示す。指導の順序や方法は、前回の大学生のときと同様とした。教材は『キラキラ星』である。

1. 中1の場合（8月15日）

時間	指導内容	気付いた点
10分	「楽器の準備」 楽器に肩当てを付ける。	モニターに指導者の楽器を近づけながら説明を行ったが、上下を逆に付けたり、片側を上げすぎたりした。

4分	「弓の準備」 弓を張って、弓に松脂を塗る。 姿勢を良くするように指導。	ここでは、問題は見られなかった。
3分	「弓を持つ」 前回と同じく、右手できつねの形を作り、弓を持つ練習を行った。	弓を持つ過程はとても難しいものだが、すぐに出来た。
10分	「音を鳴らす」「調弦」 初め、各弦を鳴らしてみ、比較的上手に弾けたので、遠隔調弦を試みた。指導者からは、A線が低くて、E線が高く聴こえ、手元のネジを操作するように指示した。	音を鳴らすことは無理なくできた。しかし調弦は、どのくらいネジアジャスターを回せば良いのか加減が分からず、最後は父親に手助けしてもらった。
5分	「開放弦の練習」 ラの音とミの音を弾いてみる。音が途切れないように、弓と弦がピターと吸いつくように弾くことを指導。ララミミと2つずつ演奏。	指導者から見て、弓を持つ側の下腕と手首が少し硬いように見受けられた。しかし被験者は痛くないと言うので、指導を続けた。
2分	「左指を押さえる」 ファ#の音を弾いてみる。 その後、先程のララミミに、ファ#を付け加えて、ララミミファファミーと演奏する。	あらかじめ、被験者の楽器には押さえる場所にシールが貼っており、それを押さえるように指示。音程も正しく取れている。
6分	「3,4小節目を演奏する」 レレドドシシラーの部分为指导。レを押さえる場所を初めに提示すると、あとは自分でできた。	レを押さえた後、レの指を離して、ドを押さえないければならないが、説明なしでできた。なお、左手首が指板にくっついていたので、空間を取るように言うことができました。
3分	「キラキラ星の中間部を演奏」 中間部ミミレレドドシー、ミミレレドドシーと2回繰り返す。	今まで、指導してきた音の範囲内で演奏できるので、すぐにできる。
5分	「キラキラ星の全曲演奏」 キラキラ星を最初から最後まで通して2回演奏。	弓を持つ手の人差し指が、少し伸びてきたので、第2関節で曲げるよう指示。

以上が中1の実践内容であるが、キラキラ星を全曲演奏できるまでの時間は48分とかなり短く、前回の大学生が1時間23分であったのを考えると、対面式のレッスンと同じくらいの所要時間であった。大学生の被験者が3人で、今回が1

対1ということもあるが、やはり被験者のピアノ学習歴が長く、音名に精通していること、そしてチェロを演奏する妹がいるため、弦楽器にも慣れているのだろう。意外に時間がかかったのは、肩当てを付けることと、調弦である。肩当ては慣れればすぐ出来るが、調弦は遠隔システムで初の試みであり、難しかった。どのくらいネジアジャスターを回せばよいのか、また音程がぴったり合った状態を知覚できる耳になるには、かなりの歳月を要する。今回、調弦できる大人が側にいたので手助けを得られたが、調弦できる人が側にいること、またはチューナーで合わせる練習を徹底させることが必要であろう。

音声や動きの遅延については、前回の学内 LAN 同士に比べて、片側が ADSL だと、音が先行して、その後に弓や指の動きが時々画像停止を伴いながら、遅延して伝わる。今回は初歩的な曲であったので、不自由は感じなかったが、高度な曲、弓や指の動きの速い曲になると指導が難しくなるかもしれない。

2. 小1の場合（1回目：8月15日）

時間	指導内容	気付いた点
8分	「楽器の準備」 肩当てを付ける。	子供の力だと、はまってもすぐに取りれてしまう。最後は父親に手助けしてもらった。
5分	「弓の準備」 弓を張る作業。	ここでは、問題は見られなかった。
5分	「弓を持つ」 右手できつねを作り、カメラに手を映しながら説明。	弓を上を持ちすぎたり、重心が間違っていたり、右手を握り過ぎたりしている。
15分	「音を鳴らす」 楽器を持って音を出してみる。 一番端っこのミの音を弾くように指示する。 (この間、指導者はミやラの音を頻繁に範奏する。) 隣のラの音を鳴らすよう指示。	楽器を持つために弓を置いたため、もう1回、弓の持ち方を指導する。 ミの音ではなく、隣弦のラの音が出てしまう。弓を頻繁に持ち直してしまうので、右手がどんどん崩れていく。 ミの音が鳴ったり、断片的にラとミが交互に鳴る状態。
5分	「調弦」 音が狂っていたので、調弦を行う。 弓に松脂を塗るのを忘れていたので、ここで松脂を塗った。	調弦は一人ではとても無理であろうと思ったので、最初から父親の手助けを得た。

8分	「開放弦の練習」 もう一度、弓の持ち方をおさらいする。 ララミミと2つずつ弾くように指示。	ララミミと音は鳴っているが、均等には鳴らなく、音も断片的である。弾いているうちに、右手が再び崩れてくる。
5分	「左指を押さえる」 ファ#の音を弾いてみる。	楽器にシールを予め貼っておいたが、楽器を置いてシールを確認して押さえるので、弓が持てなくなる。
23分	「1,2小節目を演奏する」 ララミミファファミーの練習をする。ファファの後は指を外してミを弾くように指導。ララミミにそれを付け加えるように指示。	ララミミミ？ ミミミミ？ ララミミミミ？ ミミララ？ ララファファミミララ？ ミミファファファ？ 音の並びが分からなくなってしまった。

以上が小1の実践内容であるが、キラキラ星の1,2小節目の「ララミミファファミー」の部分までを比較すると、中1のAさんは34分でできたが、小1のBさんでは74分かかってしまった。1回の実践で、小学校1年生に1時間以上かかってしまった点は反省すべきであった。時間のかかった原因に、まず弓や楽器を持つ行為に慣れていなく、しんどくなってしまう何回も持ち直してしまうことがあげられる。すると、最初にきちんと持っていた弓もだんだんフォームが崩れてしまう。また2つ目の原因は、中1の方は、年齢も上がってきてピアノも習っているので、「ラを弾きましょう、ミを弾きましょう」というと、すぐに理解でき、自分でモニターを見ながら学習ができるのであるが、小1であるとそれが通じなかった点である。

1回目の実践が終わった後、反省点や工夫する点を整理して、再度実践を行うこととなった。工夫する点は、指導者が被験者と同じ状態の楽器（押さえる場所にシールが貼ってあり、肩当ても同じもの）を用意する、もう少し進行をゆっくりして、指の形などをもっと頻繁にカメラに映し出す、「～を弾きなさい」ではなく、音の遅延はあるものの、「一緒に弾いてみよう」と言い、同時に真似をさせて弾く方法を取ることにした。

3. 小1（2回目：8月20日）

時間	指導内容	気付いた点
7分	「弓を持つ」 指導者の弓を持つ手をカメラに近づけながら説明。	映像では裏側になり見えない親指が、弓の毛に触れないよう指導。

7分	「楽器の準備」 肩当てを付ける。	指導者も被験者と同じ型の肩当てを用いて、カメラに近づけながら説明した。最後の微調整は難しいので、父親に再度手助けしてもらった。
5分	「音を鳴らす」 ミの音は一番右端の細い弦であることをカメラに近づけて見せながら範奏。ミの音が出たら、次に隣の弦のラを指導。	弓の毛ではなく、棹の際で弾くので、弓の毛全体を弦に当てるよう指示。
7分	「開放弦の練習」 ララミミと2回ずつ弾く練習。	ラやミの音は鳴るが、断片的でリズムも曖昧なので、ここで、一緒に弾く方法を採用した。
5分	「左指を押さえる」 ファ#を押さえる。前回と同様シールを人差し指で押さえる。	指導者もシール付きの楽器を用意し、カメラで見せながら指示。一緒に演奏するという方法が続ける。
5分	「1,2小節目を練習する」 ララミミファファミーを練習する。 (常に一緒に弾いて先導する形で)	ララミミを思い出すのに時間がかかる。ララミミまで弾けると、ファが思い出せず、中指で押さえようとする。
4分	「2小節目を練習する」 ファファミーの部分を取り出して練習。人差し指を押さえて離す。	常に、被験者が演奏する音に合わせて、指導者が一緒に演奏する。
2分	休 憩	
13分	「1,2小節目を練習する」 ララミミファファミーのうち、最後のミーは2拍分の伸ばすよう指導。	ファファミーとなってしまうので、ファファミーだけ取り出して練習。それに先のララミミを付け加える。

以上が小1の2回目の実践である。1回目にと比べると、総時間数は74分から55分と19分短縮した。これは被験者が少し楽器に慣れたことによるものであろう。実践での最終到達段階はキラキラ星の1,2小節目を演奏することに留まり、前回と同じであった。その中で、「～を弾いてください」ではなく「～と一緒に弾いてみようね。さんはい」という声掛けを行い、被験者と同じように弾くことは、ある程度有効であったように思われる。キラキラ星は4分の4拍子の曲であるが、Bさんの場合、1拍ごとの音の間隔が短く、音が断片的になったり、最後のミーは2拍伸ばすのであるが、リズムは最後まで思うようにはいかなかった。それを一

緒に弾くことで改善を試みたが、今回は改善できなかった。

IV まとめ

今回の実践で、中1のAさんは、48分でキラキラ星を全曲、12小節をマスターして弾けるようになった。しかし小1のBさんは2日にわたり、2時間9分かかって、最初の1,2小節を演奏した。これは、音楽学習歴の差や年齢による理解力、集中力の差であろう。Bさんの場合は弓の持ち方やリズム、ボウイング（運弓法）などで課題が残ったが、もし対面式のレッスンであれば、もう少し短時間で演奏でき課題も解決されたかもしれない。

しかし、Bさんの2回目の実践で取れ入れた「一緒に弾く」という方法は、有効であった。対面式でもよく行うことなのだが、音の遅延を逆に利用することができた。つまり、指導者が発した音がワンテンポ先に先方に伝わって、それが先導する形になり、子どもにも次に何をすべきなのか、理解しやすくなるのである。

この遠隔器楽指導を実際、実用化するのであれば、遠隔と対面をうまく織り交ぜながら指導をすべきであろう。例えば、今回の実践で、肩当てを付けるという段階は慣れれば10秒でできるが、最初は10分かかってしまう。また、弦楽器の最大の難関は調弦の問題で、チューナーを使って音を合わせる方法や、子どもの場合、親に調弦の方法を教え込むという作業を予め行っておくと、無駄な時間が省けるだろう。また、今回の場合、弓の持ち方やフォーム、ボウイングは、遠隔だけでは難しく、一度対面レッスンで矯正しておかないと、悪い癖が付いたまま弾き続けてしまうことになる。

一方で遠隔指導の利点は、対面式のレッスンが中心の場合でも、次のレッスンまでの1週間の間に忘れてしまったり、先生にうまくいかないところを少し聞いてみたいというとき、遠隔システムがあると、すぐに問題が解決できて非常に効果的であるといえる。このように、今回の遠隔器楽指導の実践では、「一緒に弾く」という方法が有効であること、そして遠隔と対面式をうまく織り交ぜた指導が有効であろうということが明らかになった。

付記

本稿は平成19年度科学研究費補助金（若手研究（B）（課題番号：19730542）による研究成果の一部である。



写真1 被験者（Bさん）側の様子（双方とも web カメラを用いてパソコンにお互いの映像を映し出している）

譜例1 『キラキラ星』「鈴木鎮一バイオリン曲集第1巻」（全音楽譜出版社）より

Violin

5

9